様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６７６５

研究課題名（和文）日本近代文学における江戸受容の通史的研究

研究課題名（英文）historical interrogation: perceptance of Edo arts in Japanese modern litterature

研究代表者
多田　蔵人（kurahito, tada）

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授

研究者番号：７０７５７６０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：研究の中心である永井荷風については、単著『永井荷風』（東京大学出版会,2017）を上梓し、かつ新発見された戦後の創作ノートについての論考「永井荷風のノート：『二人艶歌師』と『渡鳥いつかへる』の推敲（新発見草稿 永井荷風『二人艶歌師』『渡鳥いつかへる』）」を発表した（「新潮」2018,11）。荷風以外についても樋口一葉『にごりえ』、泉鏡花『銀鼎』についての論考を発表しており、小林秀雄『実朝』について学会発表も行った。また、江戸に連なる近代の出版環境についての論考を「日本古書通信」の連載に発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、日本近代文学における江戸文化受容の歴史について、具体的な作品分析と書誌的な調査の両面から明らかにすることができた。単著『永井荷風』は第6回東京大学出版会南原繁記念出版賞を受賞し刊行され、書評等でも幸いに高い評価を得た。荷風の創作ノートについては新聞等で大きく報じられた。論考が商業誌に掲載されたことも、研究の社会的意義が評価されたと言える。荷風以外の作家についての論考も、それぞれの作家の創作基盤としての江戸文芸受容の諸相を明らかにしえた。これらの成果は市川荷風忌をはじめとする講演や商業誌の連載を通じて社会に発信している。

研究成果の概要（英文）：Along the interrogation of Nagai Kafu, I've published "Nagai Kafu" (University of Tokyo Press,2017),which is the sixth recipient of the University of Tokyo Nambara Shigeru Publication Prize. And “Unknown Manuscript:“Nininn-Enkashi (Two Street-musicians) ”and“ Wataridori Itsu Kaeru (Come home,birds of passage!)” ” discribes a role of Edo literature in post-World War II era. Besides, analysis of novels and critics using Edo culture includes Pops, Waka, No-gaku among other modern-authours, founds new conception of their way of writing.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本近代文学　永井荷風　樋口一葉　泉鏡花　小林秀雄　江戸文学　書誌学　文体

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本近代文学と江戸文化の関わりを解明する研究は、近代文化の独自性を古典から逆照射する方法として、注目を集めていた。動向としては、『歴史の文体　小説のすがた』(谷川恵一、2007)の出版や、幕末明治研究会・19 世紀文学研究会の設立等が挙げられる。王朝文化や中世文化もまた、江戸の版本・写本を通じて近代に流入しており、江戸受容の研究は、今日にもつながる日本の古典受容の型を考えるための、出発点となる研究でもある。ただし、近代における江戸受容の研究は明治初期の研究に集中しており、具体的な作品分析によって江戸受容の歴史を広く見渡した論考はまだなかった。そこで本研究では、近代文学の代表作品の分析と、江戸受容に関する資料書誌の作成によって、江戸受容の史的展開を示すとともに、江戸受容が近代文化、そして現代文化の表現にもたらした影響を明らかにする必要があった。

２．研究の目的

本研究の中心は、作品分析と資料集積の両面から古典受容にアプローチすることで、作家達がどのような創作環境にあり、どのように独自の江戸観や独自の文学観を持つに至ったのかを明らかにすることにあった。

本研究の独創性は、江戸文化と近代文学の関わりをあくまでも具体的なレベルで捉えつつ、個々の作品や文学運動の史的意義を、具体的に解明しようとする点にある。硯友社と演劇、江戸趣味の実態、また小林秀雄の古典回帰と国学の関係を検討する論はまだなく、これらの江戸文化受容の調査を通じて、演劇・詩・話芸・散文といった様々な古典ジャンルを縒り合わせながら独自の表現を作り出した、日本近代文化の独自性を、多角的に明らかにすることを目的とした。

近代文学における江戸受容基礎資料書誌には、歴史・絵画・音曲といったジャンルの文献が必然的に含まれるため、江戸受容研究の基盤確立という点で独創的であるのみならず、歴史研究や美術・音楽研究においても重要な調査である。とりわけ古典文学のアンソロジーを調査した研究は、申請者以前になく、この方法は近代文化における多様なジャンル交流を具体的に知るための有効な切り口であり、メディア研究にも寄与しうる。

３．研究の方法

（１）資料調査による江戸受容作品の分析

江戸との関わりが知られる文学者を中心に、江戸文化の利用方法に着目しながら、作品分析を徹底して行った。永井荷風、樋口一葉、泉鏡花、森鷗外、などの作品を対象とし、典拠利用方法を解明し、それらが同時代の文芸思潮とどのようにかかわっていたのかを明らかにした。

（２）江戸受容資料書誌の構築

作品分析と並行して、江戸受容資料書誌の作成のための準備を行った。具体的には、宮城県亘理町立郷土資料館所蔵江戸清吉コレクション、笠岡市立図書館所蔵森田思軒資料、市川市文学ミュージアム所蔵永井荷風コレクションの調査である。近代の各時期に、江戸受容の素地となった資料群をリストアップし、江戸受容資料書誌を作成するための基礎を作った。

４．研究成果

以下に、年度ごとに内容を記す。

2016 年度は単著『永井荷風』を東京大学出版会より刊行した。荷風の文業における江戸趣味の位置を「引用」の技法として捉え直し、荷風小説のもつ複層性を指摘するとともに、

近代文学史のなかで小説言語の位相にこだわり続けた作家としての荷風像を提出したものである。

単著論文として、「歌の位相――『にごりえ』論」（2017 年 3 月、おうふう『論集樋口一葉　V』）、「《翻刻と解題》泉鏡花『銀鼎』完成原稿」（2017 年 3 月、鹿児島大学国語国文学会「国語国文　薩摩路」）の二本を発表した。前者では樋口一葉の代表作『にごりえ』について、近世文芸以来の音曲の引用を指摘し、あわせて一葉がそれらの歌謡をどのように小説内に作用させているのかを論じた。後者では、宮城県亘理町江戸清吉コレクション所蔵の泉鏡花『銀鼎』について推敲過程を明らかにするとともに、鏡花の文学知識と物語生成との関わりを指摘した。いずれの論も近代文学における近世文学の利用状況を作品に即して論じたものである。

加えて、「『水沫集』の重版を読む」（2016 年 6～8 月「日本古書通信」）において、森鴎外の代表的著作『水沫集』の版行過程を現物に基づいて追跡し、鴎外の本作りが近代書物世界の論理と深く関わるものであった点を指摘した。また「永井荷風新出書簡紹介――宮城県渡里町江戸清吉コレクションから」（2016 年 10 月「日本古書通信」）では、高月晴之助宛永井荷風書簡を紹介するとともに、当時の蒐集文化と荷風との関わりを論じた。この二論文は、近世から近代にかけての書物の流通状況の変化と近代作家の動向との関わりを論じたものである。

なお 2016 年 10 月～11 月の「江戸清吉コレクション展」（宮城県亘理町立郷土資料館）については書簡の翻刻を通じて協力したほか、「江戸清吉コレクションの文学的意義」と題して講演を行った。まず、学会発表。2017 年 5 月 13 日、昭和文学会の特集企画「〈現物〉を触る、読む–デジタル時代における〈資料〉の価値–」にて発表「小林秀雄『実朝』論――文献の位相」を行い、小林秀雄の古典論が急成長する文献学のただなかから出現したテクストであり、典拠文献を具体的に指摘した上で、小林が文献との独自の関わり方によって古典像を描き出していることを論じた。2017 年 10 月 29 日、東アジアと同時代日本語文学フォーラム第 5 回特集「言語圏とディアスポラ文学」にて「旅・記憶・動作――泉鏡花の文体生成」と題し発表。鏡花『歌行燈』『売食鴨南蛮』などについて江戸戯作・歌舞伎・和文小説などの典拠を指摘しつつ、鏡花小説の近代口語文が、様々な文体が錯綜する場から、次第に古典語の介在しづらい場へと変貌してゆく様を描出した。また 2018 年 3 月 31 日、一九世紀文学研究会にて「森鴎外『舞姫』の文体構成」を発表した。『舞姫』の文体に新国文運動・ドイツ語修辞学・漢文学などの様々な文脈が混在する様を具体的に示した上で、能文家である書き手がそれゆえに破滅に陥ってゆく悲劇として本作を位置づけた。

2017 年度は当初の予定通り、学会発表を積極的に行うとともに、文学史の基盤となる資料の紹介につとめた。

まず、学会発表。2017 年 5 月 13 日、昭和文学会の特集企画「〈現物〉を触る、読む–デジタル時代における〈資料〉の価値–」にて発表「小林秀雄『実朝』論――文献の位相」を行い、小林秀雄の古典論が急成長する文献学のただなかから出現したテクストであり、典拠文献を具体的に指摘した上で、小林が文献との独自の関わり方によって古典像を描き出していることを論じた。2017 年 10 月 29 日、東アジアと同時代日本語文学フォーラム第 5 回特集「言語圏とディアスポラ文学」にて「旅・記憶・動作――泉鏡花の文体生成」と題し発表。鏡花『歌行燈』『売食鴨南蛮』などについて江戸戯作・歌舞伎・和文小説などの典拠を指摘しつつ、鏡花小説の近代口語文が、様々な文体が錯綜する場から、次第に古典語の介在しづらい場へと変貌してゆく様を描出した。また 2018 年 3 月 31 日、一九世紀文学研

究会にて「森鴎外『舞姫』の文体構成」を発表した。『舞姫』の文体に新国文運動・ドイツ語修辞学・漢文学などの様々な文脈が混在する様を具体的に示した上で、能文家である書き手がそれゆえに破滅に陥ってゆく悲劇として本作を位置づけた。

次に、資料の報告。2017 年 9 月 5 日、「読売新聞」に「創作ノートをめぐって　晩年の荷風　推敲で「言葉の実験」」を寄稿。新たに発見された永井荷風晩年の創作ノートについて分析し、報告したものである。同ノートについては更なる詳報を「ゆっくりと引用の痕をたどる」と題して「ＵＰ」誌 2018 年 3 月号に寄稿、江戸文化の引用が晩年に抑制されていったことの理由を探った。本稿ではさらに、小林秀雄の古典論における白樺派との具体的な関連を指摘している。

このように中世・近世・近代を跨ぎつつ、江戸文化が近代の言葉に及ぼした影響を明らかにすることができた。

2018 年度はこれまでの成果をまとめ、論文発表に力を傾けた。前年度 3 月より連載した「明治大正　持続する書物」（「日本古書通信」2018 年 3,4,6,7 月）では、近代文学における重版の実態と意味に迫った。木版印刷を中心とした近世文学における出版形態と、活字印刷による近代出版との間の差異について考察する契機となる論考となった。

前年度発見された永井荷風晩年の創作ノートについては「永井荷風のノート：『二人艶歌師』と『渡鳥いつかへる』の推敲（新発見草稿 永井荷風『二人艶歌師』『渡鳥いつかへる』）」を「新潮」誌 11 月号に一部分の翻刻とあわせて論考を発表した。文学関連の商業誌では、近年では短い作品の新発見などについては論考が載っているものの、一定以上の分量を持つノートや原稿資料についての翻刻や論考が掲載されることは稀であり、作家の社会的な高い評価に繋がる掲載であったと言える。なお当該ノートについては、5 月 3 日、市川市文学ミュージアムにて「言葉を選びつづける――市川時代の荷風文学」として講演を行った。また、近代における江戸文学コレクションの先駆的存在である宮崎三昧について、その日記を中心として、「宮崎三昧『辛亥日誌』：蒐集家の表現」を発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 12 件）

（1）（査読無）多田蔵人,　「宮崎三昧『辛亥日誌』：蒐集家の表現」　日本近代文学館年誌：資料探索（14), 79-102, 2019-07　日本近代文学館

（2）（査読無）多田蔵人,「永井荷風のノート：『二人艶歌師』と『渡鳥いつかへる』の推敲（新発見草稿 永井荷風『二人艶歌師』『渡鳥いつかへる』）」　新潮 115(11), 214-235, 2018-11　新潮社

（3）（査読無）多田蔵人,「明治大正 持続する書物(4)博文館『少年文学』叢書」　日本古書通信 83(7), 12-14, 2018-07　日本古書通信社

（4）（査読無）多田蔵人,「明治大正 持続する書物(3)若松賤子『小公子』」　日本古書通信 83(6), 14-16, 2018-06　日本古書通信社

（5）（査読無）多田蔵人,「明治大正 持続する書物(2)大町桂月ほか『美文韻文花紅葉』など」　日本古書通信 83(4), 14-15, 2018-04　日本古書通信社

（6）（査読無）多田蔵人,「明治大正 持続する書物(1)土井晩翠『天地有情』」　日本古書通信 83(3), 2-4, 2018-03　日本古書通信社

（7）（査読無）多田蔵人,「百版本の世界」　日本古書通信 82(9), 10-11, 2017-09　日本古書通信社

（8）（査読無）多田蔵人, 「《翻刻と解題》泉鏡花『銀鼎』完成原稿」　国語国文薩摩路（61), 1-18, 2017-03　鹿児島大学法文学部国語国文学研究室
（9）（査読無）多田蔵人, 「永井荷風新出書簡紹介 : 亘理町「江戸清吉コレクション」から」　日本古書通信 81(10), 4-6, 2016-10　日本古書通信社
（10）（査読無）多田蔵人, 「『水沫集』の重版を読む(3) 」　日本古書通信 81(8), 12-13, 2016-08　日本古書通信社
（11）（査読無）多田蔵人, 「『水沫集』の重版を読む(2) 」　日本古書通信 81(7), 14-15, 2016-07　日本古書通信社
（12）（査読無）多田蔵人, 「『水沫集』の重版を読む(1) 」　日本古書通信 81(6), 4-6, 2016-06　日本古書通信社

〔学会発表〕（計 7 件）
（1）多田蔵人,「言葉を選びつづける――市川時代の荷風文学」,市川市文学ミュージアム荷風忌講演、2018-05-03
（2）多田蔵人,「森鴎外『舞姫』の文体構成」,十九世紀文学研究会 2018-03-31
（3）多田蔵人,「旅・記憶・動作――泉鏡花の文体生成」,東アジアと同時代日本語文学フォーラム第 5 回特集「言語圏とディアスポラ文学」2017-10-29
（4）多田蔵人,「小林秀雄『実朝』論――文献の位相」,昭和文学会　特集「〈現物〉を触る、読む―デジタル時代における〈資料〉の価値―」2017-05-13
（5）多田蔵人,「島尾敏雄の内なる図書館」,かごしま近代文学館シンポジウム「「知」の蒐集――かごしま近代文学館・島尾敏雄資料から――」2016-12-03
（6）多田蔵人,「江戸清吉コレクションの文学的価値」亘理町立郷土資料館講演 2016-10-22
（7）多田蔵人,「樋口一葉『にごりえ』論」,樋口一葉研究会 2016-07-02
〔図書〕（計　1 件）
多田蔵人、『永井荷風』、東京大学出版会, 2017.3

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：なし
ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：なし

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。